

前田青邨畫伯を偲ぶ

山内 裕子

平成二十七年三月二十三日

北鎌倉の高臺、圓覺寺敷地に前田青邨畫室あり。昭和十四年に竣工したる瀟洒なる平屋、青邨五十過ぎより四十年間の住まひなり。數年來、此の由緒ある畫伯舊宅にて讀書會、時に茶會を催す。大玄關前の梅椿の古木、庭の牡丹花に往時を偲ぶ。「洞窟の頼朝」「大國主命」など青邨描きし下繪素描拜見し畫伯の氣魄深く感ず。

昭和三十年代、香淳皇后の繪の御指南役となりし青邨の逸話微笑まし。入江侍從鎌倉に持參したる皇后の御繪評する白頭の溫顔なる青邨の言いと嚴しかりけり。「いけない」「まづい」「こんなことではならない」或は「一寸いい」を連發、暫（しばし）見たる後突然「ばあさんや」と大聲を發す。「どうだい、このたつぷりした味は。今の院展の誰に描けるか。」品のよさ、おほらかさを夫人共々大層喜ぶ。侍從東京に戻るや皇后に報告。「これは『だめ』、これは『いけない』と申して居りましたが、これとこれは、『ばあさんや』でございました。」「へえ、これが『ばあさんや』でしたか。よほど入れるのを止めようかと思つたのに。」輕妙洒脫なる遣取り也。十八年の長き御縁なれば、皇居或は葉山に伺候、時には御前にて全て「まづい」と聞こゆる折も、大いに笑ひ喜ばれ給ふ御姿いと氣高く眞に美しかりき、と入江侍從書き記す。

青邨「うるさい」「もう少しさらつと」或は「たつぷり」といふ言葉にてお傳へしたる次なる御作にいみじき御上達振り誠に見事なりけり。斯く簡略なる言葉こそ青邨自らも心掛け、教へまぬらすの在り方なるか。

鎌倉教室にて此の作文書きし後『香淳皇后の御繪と畫伯たち』畫輯を友人より拜借す。川合玉堂畫伯竝青邨「手本は大自然あるのみ」とて描かせ給ひける泰山木の畫、鮭や蟹や鳥の畫など何れも素晴しき御繪なり。愛甲次郎先生御指導の下、鎌倉教室の和やかなる學びの深まり、いと樂しみなり。深く感謝申上ぐ。

